

日本語学習辞書の現状と課題

—日本国内から発信する「日本語の解説による日本語学習辞書」の作成に関する一提案—

張 麟声

大阪府立大学人間社会学研究科

キーワード：成人学習者 単語ファミリー 類義関係 動詞の自他 使役形

1. はじめに

わたしが観察した限りでは、中国人日本語学習者は、大まかに次の3種類に分けられる。

- (1) 中国で暮らし、日本語のある程度の読解力を身に着けるために勉強している者；
- (2) 将来中国語と日本語の両方を使って仕事をしていくのが夢で、日本語を中国の大学あるいは日本の日本語学校または大学などで勉強している者；
- (3) 日本に定住し、日本語を将来における生活及び仕事の言語として勉強している者。

一つ目及び二つ目の学習者にとって一番理想的な日本語学習辞書は、日本語・中国語辞書、つまり中国語によって解説される辞書である。なぜなら、成人学習者には、目標言語を母語を通して理解するのが効果的であり、ことに二つ目の学習者にとっては、語句レベルにおける母語と目標言語の対応関係を的確に認識したほうが両言語を対等に使うのに有益だからである。一方、日本語で解説された日本語学習辞書のほうがよいと思われるのは三番目の学習者である。日本語と両立して中国語もしっかり生かしていくことを全く考えていなければ、日本語の解説を読むことによって徹底的に日本語につながる事が体で覚えていくことにつながるからである。

かといって、中国語をご存じの方があまり多くないこの研究集会において、日本語・中国語辞書に関する具体的な夢を語っても仕方がないから、理想的だと思われる日本語の解説による日本語学習辞書のイメージを述べさせていただきたい。たとえ各言語の専門家がそれぞれ日本語・～辞書を作るにしても、日本国内から発信する「日本語の解説による日本語学習辞書」がその土台となるはずであり、世界的に期待されるからである。

私の頭の中で描いている理想的だと思われる日本語の解説による日本語学習辞書のイメージを、単語から文法へという順で並べてみると、次の5つになる。

- ① 日本にしかないか、日本独自の特色を有する「もの」に関しては、メタ言語による説明に加えて、絵で示したい。例えば「寝間着」や「障子」など。
- ② 互いにファミリーを構成している単語は、ファミリーの全体図を用いて説明する。例えば、人体の部分や社会組織の構成など。
- ③ 類義関係にある単語は、互いに参照する形を取り、一番よく使われるほうの末尾に、その異同を体系的に説明するコラムをつける。
- ④ 形態的にペアになっている自・他動詞を関連付けて説明する。一部の自動詞と自動詞の使役形に関しても、同じ取扱い方をする。例えば、「死ぬ・死なす」など。さらに、ペアになっている自・他において、自動詞の使役形が使えるかどうかについても言及した

い。例えば、「着る、着せる、着させる」と「生きる、生かす、*生きさせる」など。

⑤ 付録として、本辞書が依っている「日本語教育文法」の体系を付ける。

上述の5項目の中、⑤は自明なことである。従って、以下①から④までについてそれぞれ一節設けて検討することとし、最後の第6節をまとめとする。

2. 「メタ言語による説明に加えて、絵で示したい」ケースについて

前節で例にあげた「寝間着」や「障子」について、私自身、単語としてはかなり早くから覚えたとが、実際にどんな感じのものなのかは、来日してそれを目のあたりにするまで想像もつかなかった。それもあって、まったく知らない外国のものでも辞書に絵がついていれば分かるんだと感激しながら悟ったのは、約30年も前の1986年のことである。1986年に半年間資料収集という目的で大阪大学のお世話になっていたが、ある日、図書館でアメリカの地図帳出版社であるHammond社が企画、出版したWhat's What, a visual glossary of the physical worldを目にしたとき、大いに興奮した。もっとも、実際に目にしたのは本物ではなく、小学館が出した日本語版の『英語図詳大辞典』である。その日本語版の表紙を見て、元の英語の名前にgreatやgrandのような語が一切使われていないのに、日本語の書名に「大」がついていることにひとまず興味を惹かれたが、すぐに絵がいっぱい入っている辞書字体の面白さのとりこになってしまった。辞書の第2、第3ページをコピーという形で本論文の次のページに丸ごと引用するし、また、以下、辞書の目次を紹介しておく。辞書は全体として14部からなっているが、第1部に限って細目もあげて、その下位分類の仕方まで提示する。これを参考にして、日本にしかないか、日本独自の特色を有する「もの」に関しては、ぜひメタ言語による説明に加えて、絵で示したいものである。

1. 身の回り品 PERSONAL ITEMS

男性用衣服 Mwn's Apparel: ジャケットとベスト シャツ ベルトとサスペンダー
ズボン ネックウェア アンダーウェア

女性用衣服 Women's Apparel: アンダーウェア ジャケットとズボン ブラウスと
スカート ドレス

男女共通の衣服: Unisex Clothing セーター 外套

帽子 Headwear: 紳士帽 婦人帽

履物 Footwear: 靴 ブーツとサンダル 靴の付属品

留め具 Fasteners: 留め具 開閉具

ヘアスタイルと顔毛 Hair Styles and Facial Hair: かみそり 男性の髪 整髪
用具 女性の髪 ヘアスタイリングの用具

化粧品 Cosmetics: 歯ブラシ 化粧、メーキャップ 化粧品

宝石 Jewelry: 宝石 指輪

時計 Timepieces: 腕時計 懐中時計

メガネ Eyeglasses: ——

かばん Bags: ハンドブック

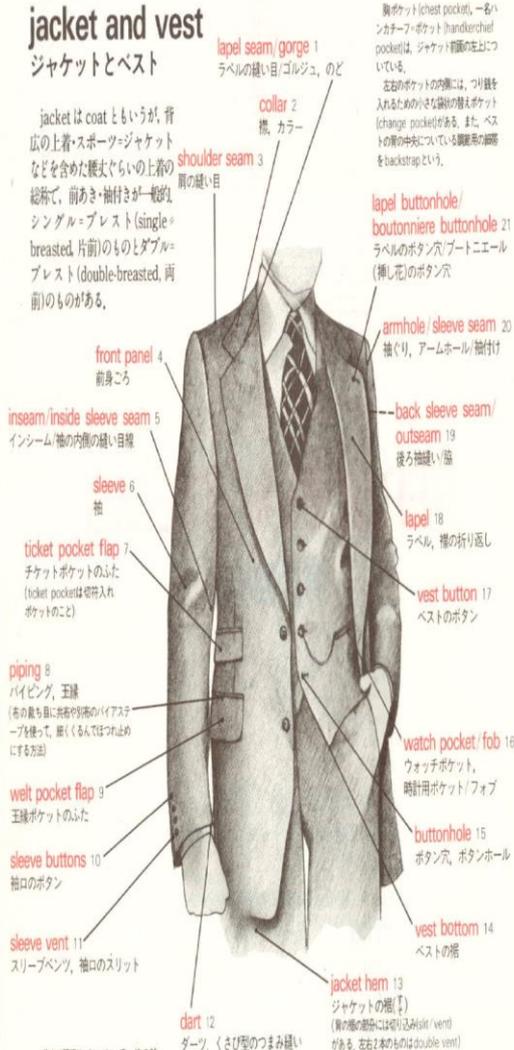
財布と通貨 Wallets and Currency: 財布 札入れ

通貨 Currency: 通貨 硬貨 連邦準備制度 米国通貨 英国通貨

小切手 Check: クレジットカード 小切手 旅行小切手 為替

PERSONAL ITEMS / Men's Apparel 身の回り品, 男性用衣服

jacket and vest
ジャケットとベスト



背広の語源は、London で一説の紳士街に立寄る Savile Row (サヴィル・ロー) がもたらしたという説があるが、¹ 軍人の海軍に於ける民間人の平民を civilian clothes とよび、口で civies というのがより妥当とされる。

背広の種類

business suit ビジネススーツ: フォーマルではない背広上下をさす。英国では lounge suit (ラウンジスーツ) という。

sack suit サックスーツ: 上着として短かめのゆったりした sack coat (サックコート) を用いたビジネス用スーツ、**three-piece suit** 三つどろえ: 男性では jacket (上着)、vest (チョッキ)、trousers (ズボン) の組合せ。

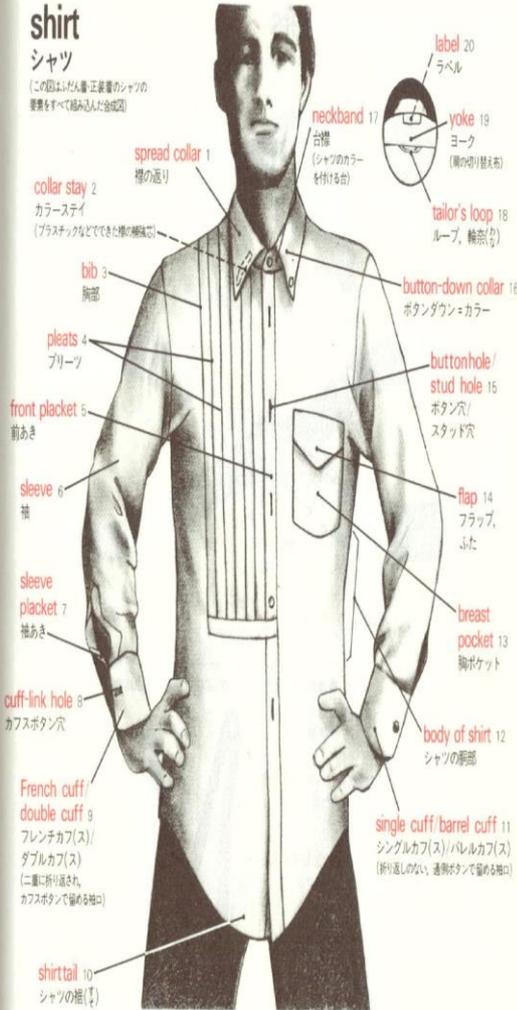
blazer ブレーザー: テーラーカラーとパッチポケットがついて

いるスポーツジャケット、もとは真紅や鮮やかな色をしていたので blazer (燃えたつもの) と名づけられた。米国東部の8大名門校の Ivy League の学生が好んで着用し、Ivy look (アイビールック) を生み出した。

男性用衣服/身の回り品 Men's Apparel / PERSONAL ITEMS

shirt
シャツ

(この図は日本人 正装用のシャツの要素をすべて組み込んだ合成図)



シャツの種類

shirt ワイシャツ、Yシャツ: 一般には背広の下にネクタイを締めて着るシャツの総称。ワイシャツはホワイトシャツがなまったものとされる。

dress shirt/formal shirt ドレスシャツ、フォーマルシャツ: タキシード (tuxedo) や燕尾 (tailing) 服 (dress suit) とともに着られる礼装用ワイシャツ。胸前にプリーツやラッフル (ruffle)、ひだ飾りが施してある。ビジネス用ワイシャツ (白または薄青色長袖のもの) の意味にも用いられる。

sport(s) shirt スポーツシャツ: ネクタイを用いずに着るシャツの総称で、次のようなものが含まれる。

aloha shirt アロハシャツ: 元来ハワイで着られた派手な柄の盛夏用のシャツ。

cutter shirt カッターシャツ: 襟とカフが身ごろに付いたシャツ。今ではワイシャツもカッターシャツ形式になっている。昔のシャツは襟が身ごろと離れていた。

open-necked shirt 開襟シャツ: ネクタイなしで着る。前襟の開いたシャツ。

polo shirt ポロシャツ: 丸首または折り返し襟の付いたシャツで、ふつう半袖が多いが、長袖のものもある。元来は Polo 競技用に用いられた。

- 2 ホーム HOME
- 3 医療 MEDICINE

- 4 交通 TRANSPORTATION
- 5 情報伝達 COMMUNICATIONS
- 6 住居と建造物 SHELTERS AND STRUCTURES
- 7 スポーツとレクリエーション SPORTS AND RECREATION
- 8 芸術と工芸 ARTS AND CRAFTS
- 9 サインとシンボル SIGNS AND SYMBOLS
- 10 制服・衣装・礼装 UNIFORMS, COSTUMES AND CEREMONIAL ATTIRE
- 11 兵器 WEAPONS
- 12 機械と道具 MACHINERY AND TOOLS
- 13 生物 LIVING THINGS
- 14 地球 THE EARTH

3 単語ファミリーを構成する単語に関する解説について

ここで言っている単語ファミリーは、熟した言い方ではなく、互いに関連性を持つ単語という言い方に置き換えてもよい。このような言い方が生まれる背景には、文化人類学のほうで問題にされてきた民俗分類 (folk taxonomy) という発想がある。民俗分類 (folk taxonomy) の研究史への言及を省略し、直接そのケースに当たると、たとえば、よく知られているように、日本語の牛に何らかの形で該当する表現として、英語には cattle、cow、ox、bull など単語が数多く存在するが、そのどれ一つ「牛」に完全に対応するものはないという。このような事情に対応するために、高校生の間でかなり人気があると聞く『ジーニアス和英辞典(第二版)』においては、次のように、「牛」の訳語として、複数の単語を一か所にまとめて説明している。もっとも、引用に際して、用例及び必要ではない記号の一部を略した。

Cattle [集合的に; 通例複数扱い] 畜牛、ウシ 《cow、bull、heifer、bullock、calf などの総称。⇒ **関連**》

Cow **[c]** 雌牛; 乳牛、ウシ 《◆ox が動物学的な総称であるのに対し、cow は牛乳と結びつく一般的な名称》(ヒンドゥー教で) 神聖な牛

Ox (Ⓢ oxen) **[c]** 雄牛、(特に食用、荷役用の) 去勢雄牛; ウシ 《◆動物学的な総称; スイギュウ・バイソンなどを含む》

Bull **[c]** (去勢していない成長した) 雄牛

関連 [牛の種類] 雄牛 bull, ox《去勢した》, bullock《4歳以下》 / 去勢牛 bullock, Stag / 小牛 calf / 肉牛 beef cattle / 乳牛 cow, dairy cattle / 雌牛 heifer 《3歳未満》

現代日本語の「牛」の言い方も同じく「入り乱れている」のではない。しかし、日本語には日本語なりの「民族分類」(民俗分類 (folk taxonomy) ではない)が見られる。以下、教育者である私たちにたいへん身近な教育関連の語彙を例に、少し詳しく述べてみることにする。

教育機関として、「学校」というのがあり、まずこの「学校」関連の語彙を『日本語教育語彙表』(以下『語彙リスト』と略す)から次のようなものを抜き出してみた。①②のような番号は『語彙リスト』に載っている「語義1」「語義2」などの語義を指す。

学校：①教師が生徒に教育を行う組織。②教師が生徒に教育をおこなう場所、施設。③教師が生徒に教育を行う組織。

大学：高等教育の中核となる学術研究および教育の最高機関。

短期大学：修業期限が2年または3年の大学。主に専門的な職業に必要な知識と技能の教育や、実生活に役立つ能力や知識を育てる教育を行う。短大。

短大：修業年限が2年もしくは3年の大学。

高等学校：中学校を卒業した人に対して高等普通教育や専門教育を行う学校。高校。

高校：第二次大戦後の新しい制度に基づく高等学校, 高等学校の略。

中学：小学校を卒業したあとに3年制の義務教育を受ける学校。

中学校：小学校課程を終了した人が、3年間の中級の普通教育を受ける義務制の学校。

小学校：満6歳以上の子供に、義務教育として6年間の初等普通教育を行う学校。

高等専門学校：科学技術者を養成する教育機関。中学卒業後入学し、修業年数は5年。

専修学校：①学校での教育を行うための法律に基づいて、人々に職業または実際の生活に必要な知識や技術を教える学校。修業の年期は1年以上。②学校での教育を行うための法律に基づき、人々に職業または知識や技術を教える学校の中で、入学資格に学歴を問わないもの。

養護学校：精神の発達に障害のある児童や体に不自由のある児童や病弱な児童などに対して、普通教育に相当する教育を行い、併せてその障害を補うために必要な知識や技能を教える学校。

予備校：上級の学校、特に大学の入学試験準備のための指導を行う施設。

この単語ファミリーを見て、まず気になるのは、「短大」は「短期大学」の略、「高校」は「高等学校」の略であるのに対して、「中学」と「中学校」とはどういう関係にあるのかということである。「中学」と「中学校」の語義を読めば、前者が後者の略ではないことは分かるが、では、二つの語が全く同義なのか、それとも類義なのか、類義ならばどのように異なるかは現在の解説では見て取れない。

もっとも、「中学」と「中学校」の関係よりも、もっと知りたいのは、学校はどこまでの機関の総称なのかということである。「①教師が生徒に教育を行う組織。②教師が生徒に教育をおこなう場所、施設。③教師が生徒に教育を行う組織。」という3種類の語義のいずれも教師対生徒という捉え方となっているので、大学や短大は含まれないが、高等専門学校はどうなるのか、また、学ぶ者が生徒というよりは普通児童と言われる小学校はどうなるのだろうか。さらに言うと、『語彙リスト』におけるほかの語の解説や例文において、以下のように「学校」が使われているが、これらの「学校」の指示対象はみなこの「学校」と一致しているのだろうか。

行く：(上の学校へ)進む、入学する

いじめ：学校で、大勢が一人の人を精神的または肉体的に辛い目に合わせること。

学資：学校に通って学問をするために必要な費用。学費。

学長：大学の長。大学の学校業務を担当し、職員を統率し、監督する。

学内：学校の構内。また、学校の組織の内部。

通う：定期的に学校へ行く。

カリキュラム：学校教育で、系統に基づいて組織された教育の計画。教育課程。

教育課程：学校教育で、系統に基づいて組織された教育の計画。

願書：入学を希望する学校へ必要なことを書いて提出する書類。

下校：生徒が学校から家に帰ること。

欠席：学校を休むこと。

校長：学校の最高責任者、またその地位。

授業：学校などで学問などを教えること。

登校：学校へ行くこと。

続いて、単語ファミリーの例をもう二つあげる。教える側と学ぶ側のことである。教える側のグループでは、教師または教員が、そして、学ぶ側グループでは、学生がどこまで総称として使えるのかくらいには、明確な解説がほしいが、現在の記述ではそこまで明晰に示せていない。

・教える側：

教師：学問や技術を教える人。

教員：学校で教育する仕事をする人。

教官：①国立の学校や研究所で、学問や技術などを教える役人。②教育に関することを担当する役人。③古い制度の中学や高校や大学などで軍事の訓練を担当した軍人。

教授：大学などで教育、研究に従事する職業の最上位の位の人。

教諭：教員免許状を持っている教員。小学校や中学校や高等学校や幼稚園や養護学校などの正規の教員。

講師：①小・中・高校の非常勤の教師。また、専門学校・予備校・塾で講座を担当する人。②大学で、教授・助教授に準じる職務を行う教員。

助手：①仕事の補助・手伝いをする人。②大学で教授の職務を助ける人。

・学ぶ側

学生：学校で勉強する人（特に大学生[ダイガクセイ]）。

大学生：大学で学ぶ者。

高校生：高等学校の生徒。

中学生：中学校の生徒。

生徒：①中学や高校で勉強する人。②教えを受ける立場。

学童：小学校で学ぶ児童。小学生。

小学生：小学校に通っている生徒。

（児童：1 低年齢の未成年者。2 児童福祉法で、18 歳未満の者。）

「児童」という語を括弧の中に入れたのは、この語は、小学校で学ぶ者を指すと考えられるが、上述の語義の1にも2にもこのような記述がないからである。しかし、『語彙リスト』における次のような「児童」の使い方には、このような意味が含まれていると考えられるので、「児童」の解説を修正する必要があるのではなかろうか。

在学：学生、生徒、児童として、学校に籍を置くこと。

修学旅行：名所や史跡などを実際に見学させるため、教員が児童や生徒を引率して行う団体旅行。

転校：児童や生徒や学生が、ある学校から別の学校に籍を移すこと。

P T A：保護者と教師の会。学校ごとに置かれ、児童や生徒の保護者と先生とが協力して教育に奉仕する会。

父兄：一人前になっていない子供の保護者。特に児童や生徒の保護者。

養護：保護を必要とする児童や生徒の健康を保護し、その成長を助けること。

3. 類義関係にある単語についての解説について

類義関係にある単語について、その使い分けを提示すべきことは、よく知られ、また、30数年前から出版している『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』などですでに実践に付しているので、その理屈について今更述べることはない。ただその時点で取り上げられている類義語は比較的メジャーなものばかりであるが、実際は日本語ネイティブの研究者の目に重要な類義語として映らないものでも、日本語教育の現場で学習者を困惑させることが多い。以下、前節に続き、同じく教育関連のものから例をあげていく。2つのグループとも現在の解説のままでは、互いの違いが学習者には伝わらない。「日本語の解説による日本語学習辞書」にこれらの単語を収録するならば、それ相応の努力が求められるであろう。

- ・ **学校**：①教師が生徒に教育を行う組織。②教師が生徒に教育をおこなう場所、施設。③教師が生徒に教育を行う組織。

学院：「学校」の別称。

学園：学校。

スクール：学校。

- ・ **教材**：授業や学習に使う教科書や材料のこと。

教科書：教科の学習指導上の中心となる教材として編集された書物。

テキスト：教科の学習や、講習会の教材としての本。

4. 動詞の自他のペアにある単語に関する解説について

漢語語彙は、中国語や韓国語を母語とする学習者が学びやすく、「は」と「が」の使い分けは韓国語を母語とする学習者にはほとんど問題がないと言われるが、動詞の自他が何らかの言語を母語とする学習者にとって優しいということはまったく聞かない。したがって、「日本語の解説による日本語学習辞書」を作るとなれば、動詞の自他に関する取り扱いは、誰の目から見ても重要な事項になる。それに加えて、本稿で主張したいのは、形態的にペアになっている自・他動詞に限らず、「死ぬ・死なす」のような一部の自動詞と自動詞の使役形に関しても、同じ取扱い方をすべきであり、さらに、ペアになっている自・他において、自動詞の使役形が使えるかどうかについても言及したい、ということである。

前者、つまり、形態的にペアになっている自・他動詞に限らず、「死ぬ・死なす」のような一部の自動詞と自動詞の使役形に関しても、同じ取扱い方をすべきだという主張をする理由は、典型的な使役行為でなくても、日本語では他動詞がない場合、それを補う形で自動詞の使役形が用いられることがあるからである。ここで言う典型的な使役行為とは、人が人に指令を出して行為を行わせることであり、このような行為を表すのに使役形を使うのは、どの言語にも通

じるところだと思われるが、日本語では人が自ら行う他動的な行為を表すのにも、自動詞の使役形が使われることがあり、例えば、『語彙リスト』の8933番の単語が自動詞の「吸い取る」であるが、その使役形はよく次の例のように使われているのである。

- ・乾いたタオルで叩いておしっこを吸い取らせ、その後洗濯洗剤を薄く溶かしたぬるま湯でタオルを濡らして、固く絞ったもので入念に叩いて拭き掃除をし、蒸しタオルで叩いて水拭きし、乾いたタオルで叩いて水気を吸い取らせ、それからドライヤーか布団乾燥機で乾かす、です。
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11134666491/a337833428)

また、後者「ペアになっている自・他において、自動詞の使役形が使えるかどうかについても言及したい」と主張する意図は、日本語の、典型的な使役行為は使役形で表し、典型的な他動的行為は他動詞で表しているケースを学習者に伝えたいところにある。

例えば、「着る、着せる」というペアにおいて、自動詞の使役形である「着させる」は以下のように用いられる。

- ・保育園入園準備をしています。名前を書く場所について、上の子に着させる服を下の子にも着させようと思っっています。
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1321765563)
- ・そこで最近子供服のシェアをしている所が存在します。(略)これは昔のお下がりと同じですが、良い点は着させる側が好きな服を選べるといふ事にあります。そして貰った人の目もあるので、ある程度は着させないといけない場合もあります。しかし子供服のシェアであれば、好きなものだけを着させる事が出来、いらなくなったらまたシェアの場所に戻すといふ事も出来ます。

一方、例えば、「生きる、生かす」というペアの自動詞の使役形である「生きさせる」は典型的な使役行為を表すのに使えない。もっとも、「生きさせる」の用例がないわけではない。例えば、以下のようなものである。

- ・日本のカブトムシを成虫の状態ですら1年以上生きさせることはできますか？

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14137414809)

しかし、この場合の「生きさせる」が表しているのは典型的な使役行為ではなく、一種の他動的行為でしかない。もっとも、この場合の他動的行為と他動詞の「生かす」が表す他動的行為とは同じものではないので、この種の違いもできれば明示しておきたい。

6. まとめ

本論は考証的な論文というよりは、一種の提案文体のものである。日本国内から発信する「日本語の解説による日本語学習辞書」の上梓を心から願うが、それが難しい場合は、せめて現在の『語彙リスト』にそのような夢の一部を託したい。ゆえに、ほぼ全面的に『語彙リスト』の記述を改善できるような形で論を進めてきたわけである。失礼千万を関係者諸賢に乞いたい。

参考文献

小西友七他編(2003)『ジーニアス和英辞典(第二版)』大修館書店

瀬戸 賢一他編(2007)『英語多義ネットワーク辞典』小学館

文化庁(1975年)編集『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』大蔵省印刷局

レジナルド・ブラゴニア・ジュニア、デビッド・フィッシャー編集、堀内克明他編訳(1985)『英語図詳大辞典』小学館